

今ここで静かな問いかけを物語る人

山下静男第六詩集『クジラの独り言』に寄せて

1

山下静男さんの詩は、静かな内省の詩だ。じっくりと他者の言葉や世界の在りように耳を傾けて、その意味を確かめて、いま自分の置かれている状況の中で他者との関係を考えようとする。決して人を驚かしたり知識を散りばめたりする手法ではないが、その問いかけの仕方は、他人事ではない、いつも自己の内部に向けた切実な試みであることが伝わってくる。その問いの指し示すものが、山下さんの事だけでなく、実は読み手もまた、同じように問われていると感ぜられてくるのだ。その山下さんの静かな問いかけの手法にこそ、詩作を生涯にわたって継続することにおいて、最も大切なことが秘められているのではないか。

山下さんは一九二九年に岡山の真庭郡に生まれた。一九四四年、一九四五年には十五、十六歳で福島三井造機や三井造船などに学徒動員されて、旋盤工をしていた。工場や自宅は岡山空襲に遭遇したのだろう。その破壊と喪失の経験を胸に秘めながら二十歳の頃に、戦後の岡山で一九五〇年代の初めに詩誌を作り出した吉塚勤治の「くるまざ」や西川一

郎の「日本主体派」などに参加して、詩を書き始めたという。その後一九五四年に井奥行彦主宰の「火片」同人となり、半世紀以上の今も「火片」で書き続けている。新詩集『クジラの独り言』の中にも、詩「また背中がひりひりする」という空襲体験のことを生々しく書き記した作品がある。その記述の仕方も身近な戦争の実相の怖さを静かに問いかけている。第一詩集『稜角の投影』から新詩集までを読んでもみると、生涯をかけて静かに内部に問いかけてくる詩作の根源的な探究心を詩作の中に感じさせられた。一九六二年に刊行された第一詩集の詩「喪失」を引用してみる。

喪失

その日は

夕霧がさんと降っていた

無気味に静まった荒地の工事現場は

墓標を重ねた漆黒のシルエットをなげ

エヤーハンマーの音だけが腹に響く

ぼくは呼び止められた

ふり返ると誰もいない

生来夕映えが美しいと無思慮に歩くぼくだ

オレンジに染まった西の空を眺めながら
工事現場の中を突っ切る

依然キラリキラリと黄金に光り
夕霧は沈黙した中を降りそそぐ

理由なく道を急ぐ
やめろやめろ

再び声を聞いた
強大なコンクリートビルが立ちほだかり
音もなくクレーンが迫っているだけだ

生きものらしいものは認められぬ
しっ気が皮膚をうるおして
無数の鉄片が光る

突然機械音が鳴る

ガクン
肩に衝撃

銀色のかすがいがくい込んでいる

力いっぱい引きしぼる
だがすでにかすがいはぼくの関節になる

やめろ やめろ
それは巨大な工事場の空の上
霧の降る方向だ
無数の鉄片や釘が
手といい 足といい 指にまで関節となつてくいだむ
ぼくは機械的な機能を發揮し出した
ぼくは観念し
魂を西の空のオレンジの霧に向つて投げた

それ以来ぼくは言葉を止めた
工事場は
人っ子一人いないで
機械だけが働いている

コンクリート柱が続々生える中
夕霧は止まない

「それ以来ぼくは言葉を止めた」という一行は、若き山下さんの表層の言葉を否定し、深層の言葉を求める激しい意志を感じさせてくれる。その詩行の前の連の「魂を西の空のオ

レンジの霧に向って投げた」ことから、詩の言葉とはきつと死者たちの魂に釣り合うべき言葉でなくてはならないと物語っている。この「喪失」という詩は、特別に戦時中の空襲によって人々が逃げ惑う姿は描いていない。しかし「墓標を重ねた漆黒のシルエツト」という比喩によって、戦争中の無数の死者たちを想起しているのだろう。山下さんの第一詩集の手法は、自らの戦争体験を直接的に書かないで暗喩的な言い替えを試みて、簡単に死者たちを葬れない心情を語っているかのようなのだが、根本には深層の言葉を探し出そうと模索しようとして挑戦していったのだろう。詩集のタイトル詩の「稜角の投影」という言葉も、その屈折した心情を尖った角が投影する何かを探し出そうとしていたのだろう。多くの死者を出した悲劇の場所である工場跡地も、人々を置いてきぼりにして、無人の「機械だけが働いている」戦後の復興された経済状況を重ね合わせ表現しているようにも思われてくる。「魂を西の空のオレンジの霧に向って投げた」という詩行には、死者たちを忘れてはならないという山下さんの心情を感じる事ができる。だからこそ「コンクリート柱が続々生える中／夕霧は止まない」のだ。霧や夕霧に込められた死者たちを愛惜する心情と呼応する死者たちの思いが、戦後に復興してくるコンクリートの建物に降り続けていると山下さんは幻視していたのではないか。

山下さんの父は国鉄の鉄道技師であり、子供の頃には土讃

ろう。

落とす物は

四つのおとき

五十銭銀貨を落とした

ビシヨビシヨ充ちてくる闇の下に

鳳凰ほうおう模様が白く光るのを

小さい頭に描いて

枯れ草を踏んで行ったり来たりした

もの心がつき出すと

よく物をなくする自分を悔いた

貧しかったから

父はあらん限り罵倒して探させた

いくら探しても物が出ないと知ったとき

家を出てしまった

それを落とせ

大人になると

上司は繰り返しほくに迫った

その衣装を気楽に投げすて

華やいだステージの階段を

線を敷設するため四国の山を切り拓いていく現場に家族と子ども赴任していた。山下さんの原点には働く労働者たちの生き生きとした姿が脳裏に過ぎるのだろう。自らも学徒動員された軍事工場で働いていたが、その場所が空襲によって一瞬で破壊されていく様を書かざるをえなかったに違いない。しかし余りにも痛ましいので、リアルには書けないゆえにこのような暗喩的でありながら深層言語を模索する手法に寄りざるをえなかったのではないか。その意味では、山下さんは死者を葬り去って省みない戦後社会の中で大きな違和感を抱きながら、詩作を出発したのではないかと考えられる。

2

山下さんの第二詩集『駆ける』は一九八三年に刊行された。岡山師範学校を出て小学校教師になった山下さんは、三十三歳で第一詩集を出した後、二十年ぶりに詩集『駆ける』をまとめたことになる。この詩集の特徴は、第一詩集のような暗喩を極力少なくして、本当に必要な所で効果的に用いている。また戦後社会への違和感を抱え込んだテーマの詩篇もあるが、教師生活で触れ合った子供たちや教師仲間を通して人間の存在の複雑な実相を受け止めた言葉で書き記している。次に引用する詩「落とす物は」は、父や上司との葛藤を通して、山下さんが真に大切にしなければならぬ価値観やそれに基づいて生きてきたことを回想して、自らの人生観を記した詩だ

カツカツ昇る人をうらやましく眺めた

その衣装をまとい続けるうちに

ぼくは拍手をしない観客となった

落ちる物は

無意識のうちに落ちて

ぼくの皮膚は少しも傷付かなかった

落とせといわれた物は

ぼくの内臓がちぎれるようで

しっかりと胸に抱いた

いまぼくは

少年と手をつないで

一本道を行ったり来たりする

お前の落とした物は

ポケットに入れると

ずっしりと重くなるものだ

だが

そちらのふくらんだポケットは

紙屑だ

粉にして風に飛ばせ

陽炎の立ち昇る青空の下で

第一詩集の詩「喪失」で決して「喪失」できないものを山下さんは確認していった。第二詩集の詩「落とす物は」で自分が生きていく上でどうしても譲れないものは、例え親子であっても譲ってはならないと記している。第一連の「落とす物」は落としてしまったお金のことで、父から幼少の頃から金銭の大切さを徹底して教えられたのだが、成人して人生の岐路に立った時に、決してお金だけの利害損得でない、自らの大切することや価値観の選択をしたのだろう。「父はあらん限り罵倒して探させた／いくら探しても物が出ないと知ったとき／家を出てしまった」と山下さんは淡々と語っているが、この詩行の背後には、きつと生き方や価値観の違いで父と訣別した辛く複雑な思いが秘められているのだろう。

第二連の「落とす物」は、金銭ではないが、何か権威や名誉欲のことを指しているように思われる。上司が「それを落とせ」といい、教師として出世していくための管理職の心掛けを伝える時に、逆に山下さんは本当に「落とす物」は権威や名誉欲ではないかと反発して、異なる価値観を抱いていたのだろう。きつと山下さんは権威や名誉欲に向かわずに真の教師のあり方とは何かを日々の教師生活の中で模索していたに違いない。第三連は障害児のクラスの生徒の手を握りながら、少年の「落とす物」こそ最も大切なものであると再確認し、彼らの存在を落としてはならないと、その「ずつしりと重くなるもの」を讀んでいる。そして逆に権威や名誉欲などが詰

ぼくも、いなくなった火垂るを求めていつてみたい」
「話が出来上がったら出版してね」
と、声がうわずった。

このごろ

中学生の息子との間がよくない。
勉強をしると言うのと横目でみて
ふいと部屋を出ていくらしい。
下着の洗いや取りにいくと
会話は全くなく、よろよろ階段を下りる。
蛭物語の筋書き、あれは逆だ。
妻が火を求めて子供を探しにいつている。

「あつ蛭が群っている。
ほっほっ、ほーたるこい」
クリスマスツリーに触れながら歌う。
ケーキを中心に御馳走で食卓を飾っているのに
息子は帰って来ない。
「冬場の蛭なんて淋しい。

でも、火垂るっていい言葉ね。
赤の色も、青の色も、またたきながら降ってくる」
蛭が光るのは、雌雄が呼び合うのだが
幼虫は外敵に対して威嚇するのだという。

まっている」そちらのふくらんだポケットは／紙屑だ」と告げている。この詩は子供たちを愛する真の教師の高貴な精神性が宿っていて、山下さんの詩の中で最も優れた詩篇だと私には感じられた。

3

第三詩集『火垂る物語』は教師を定年退職した一九九〇年に刊行された。そのタイトル詩の「火垂る物語」を讀んで、この世に生きる命の儚さや命が伝承されていくほろ苦さを痛切に感じさせてくれた。長くなるが引用してみる。

火垂る物語

「わたし蛭の物語を書いてみるつもりよ」
詩の原稿にあくせくしていたばかりの部屋に
音もなく妻が入っていた。

「わたしの生まれは河口でしょう。

むかしはあのあたりの沼にも蛭がいっぱいいたのよ。

子供蛭が親を求めて河を上っていく旅物語を書くの」

久し振りに顔に生気が蘇り瞳が美しい。

今日は医者からしおれて帰っていたが。

「蛭の物語ねえ。

万葉では火垂ると書いたそうだよ。

この年頃の息子は
親を敵としなくては通っていきぬ
人の世の苦しい成長過程にいる。
妻にはそれが分かっていながら
鋭敏すぎる脳神経がゆさぶられるのだ。

妻が病院のベッドで体を起こした。

「今日は、おぼんの入りね。

いつだったか子供と山陰の海にいったときがなつかしい。

キラッ キラッ

夜の海は、波が呼吸する度に明滅したわ。

ほたるいかが。

あつ ほたる。

あなたも光る。K男も光る。わたしも光る。

みんな清冽に炎える。

ああ 銀粉が降る。

炎える。ほたるよ火垂るよ。

わたし 火垂るを追って河を上っていくわ」

それつきりこの世に帰れぬ岸を歩いていった。

息子を乗せて河に沿って車で上る。「ちよつと待たせ。
こころあたりかな 弟ぼたるが道に迷い姉ぼたるが叫びま
わった所は」

中洲の草叢がみずみずしい。

河口では見られない透明さで小石がおどっている。

夕暮れ、山家の灯が明滅するまで車を走らせた。

助手席の息子に妻の蛸物語を聞かせると

能面の白い頬に一粒だけ光るものを結んだ。

この詩で山下さんは、妻と子の不和をテーマにしているけれども、読む者にとって人間の命や人間の家族の在りかたが、実は蛸の営みと等価であり、永遠の命につながっていることを伝えている。この比喩の使い方は暗喩的ではなく隣接する物事で案じさせる換喩的な比喩であろう。この自らの家族関係を蛸にまつわるリアリズムで語りながらも、いつのまにか命を継承していく営みの痛切な思いを淡々と物語化している。「この年頃の息子は／親を敵としなくては通っていけぬ／人の世の苦しい成長過程にいる。」という詩行は、人が自立していくことを見守るしかない親にとっての真実を告げている言葉だろう。その意味で山下さんは家族の一人ひとりの命を見詰めて、その命の交感を共に生きようとしている詩人なのだ。そうでなければこのような命のゆらぎや命の儚さのただ中を虚心に記すことはできなかっただろう。この詩で妻の言葉は詩神（ミューズ）のように山下さんの心の中に啓示を与えている。山下さんが病弱でありながらも個性的で文学的精神を抱えていた妻の存在を慈しんで、生きてきたことがよく分

かる。蛸は光の言葉を持っているが、人も親しいもの同士であるなら、互いの発する生きるエネルギーのような光の言葉を交換できるのではないかと山下さんは物語っている。妻から夫へそして子へと発せられた光の言葉がこの「火垂る物語」には静かに瞬き心に刻印されてくるように感じている。

4

山下さんは一九九四年に第四詩集『さる さり さーれ』を刊行したが、この詩集は詩画集でもあり、干支をテーマにし、岡山日報社で年頭の詩として二十四年間にわたり発表された詩群とそれに組まれた宮俊彦の挿画を収録したものだ。宮俊彦は岡山師範学校の同級生で東京芸大に進んだ後に山下さんと同じ岡山の小学校の教員となった。そんな親しい友との年頭のコラボレーションは、山下さんに詩的なユーモアを感じさせる表現方法を試みさせていたように思われる。詩「おさるのかくれんぼう」を引用してみる。

おさるのかくれんぼう

おさるがかくれんぼうをしました
たあらたあら木の枝がゆれて
葉っぱの茂みにかくれましたが
尻尾がぶら下っているの

すぐわかってしまいました

おさるがかくれんぼうをしました

くうらい森をちよこちよこ走り

迷路をぐにぐに急ぎました

猿面 猿知恵 猿芝居

いたたまれずに這い出しました

おさるがかくれんぼうをしました

猿の腰掛 猿戸 猿糞

言葉の裏にかくれました

猿の尻笑いにのっかって

すぐ曝されてしまいました

おさるがかくれんぼうをしました

たあらたあら木の枝がゆれて

どこかに深くかくれました

申の刻 申の方角へ去り

もう帰っては来ませんでした

百日紅がただ一輪

紅く空を染めていました

この詩の魅力は、猿がかくれんぼうをするという発想の面白さだろう。その想像力によって読み手を森の中に入り込ませてしまうような豊かな魅力を感じさせてくれる。木々を渡って行く猿の機敏な動きに引き込まれて、あたかも猿と一緒に森を自在に飛び回っているかのような錯覚を覚えさせる効果がある。正月に読まれるからと言って、めでたさをこじつけることなく、書きたいことを「申の刻 申の方角へ去り」などの言葉遊びも入れながら、自由に書いているだけだ。山下さんは百日紅という樹木名を命名した日本人のある種のユーモア感を再発見させてくれたのかも知れない。それだけでなく、「猿面 猿知恵 猿芝居」とたたみかけるリズム感は、猿と同時に人間の存在もまたどこか笑い飛ばしているような面白さも感じさせてくれる。猿などの動物と人間とは等価であるという生命観を、山下さんは心底から語っているからこそ、自在な発想が生まれたように感じられた。山下さんは現代詩の難解な暗喩的な思考から離れて、隣接する人間にとっての他者である猿などの動物からヒントを得て、その動物たちをしなやかに認識し人間の心の奥底を覗き、詩を多くの人たちに届けようと試みていたのだろう。その伸び伸びした詩行のユーモアが新詩集の『クジラの独り言』につながってくるだろう。

二〇〇六年に刊行された第五詩集『梅漬け』は教師を退職し一人の人間として教え子たちを回想したり、家族との暮し

の細部から命について触れたりしたことを書き記したものだ。そして今回の詩集『クジラの独り言』は、今まで具体的に触れたことのない戦時中の体験や家族・地域社会への思いを深めながら、世界との関わりの意味を提示してくれている。一章「野仏様」の十四篇には、軍事訓練を受けていた仲間たちと将校との軋轢、岡山空襲の生々しい体験、広島原爆の後遺症で亡くなった友人や知人たちのことなどの歴史に翻弄された人々を回想した詩群だ。二章「クジラの独り言」の十五篇には、山下さんの現在の世界との関わりが暮らしの現場から手触りのある感性と奇抜な想像力で記されている。その中の最も優れた詩篇がタイトル詩「クジラの独り言」だろう。この詩篇を引用してこの小論を終えたい。人間の言葉もクジラの言葉と同じように他者に通じない独り言のような不完全なものかも知れない。しかし、それでも人間もクジラも独り言を言い続けて世界とは何かと問うたり、愛するものを偲ぶ言葉を呟いたりするものだと言っている。今ここから猿やクジラを思いやる少年の心を持ちながら、教師、父、夫、祖父、そして街を愛して静かに内省する多様な顔を持つ山下さんの詩篇は、きっと多くの人々の心の奥底に届くに違いない。

クジラの独り言

小鳥の声に目をさました

なにかを訴えている
窓を開けて耳をそばだけると
カザルスのメロデー^{*}を残して
舞い上がった

言葉でさえ

なかなか心の裾^{しぼ}を伝えてくれない

中国の若者の排日デモ

いまの日本人にはよく伝わらない

郵政民営化の大事な法案

与党の議員でさえ分からない

前夜仕込んだ知識を

机をたたいて教えたが子供達は生あくび

三十年連れそった妻でも

遺品の日記に

主人には私の言葉が通じませんと

七十年来使って来た文言は

朦朧^{もうちろう}として形を成さず

指を開いて空をつかむ

あげつらうように

自分の詩の連なりが

巻き上がりながら消えていく

アメリカ海軍の潜水艦の記録には

ヒゲクジラが

十二年ただ一人で遊泳していると

これまで聞いた事のない

声を発しながら

*パプロ・カザルス「鳥の歌」